

信仰と生業のつながりから見た丹後

—丹後地域現地調査報告—

島本 多敬

1. 調査概要

本章では、平成 27 年（2015）11 月 16 日・17 日におこなった丹後地域現地調査について報告する。

参加メンバーは以下の通りである。

川口成人（京都府立大学大学院文学研究科博士後期課程 2 回生）

島本多敬（京都府立大学大学院文学研究科博士後期課程 1 回生）

三輪眞嗣（同上）

稲穂将士（京都府立大学大学院文学研究科博士前期課程 2 回生）

本調査は京都府立大学大学院生有志を主体として、下記のプロジェクトにかかる補充調査として実施した。ただ、その内容・成果は単なる補充調査の域を超えているため、本書に別項を立てて報告することにした。

(1) 平成 27 年 12 月 5 日～28 年 1 月 17 日の期間、京都府京都文化博物館にて開催された特別展「日本のふるさと 大丹後展」（以下、大丹後展）における、京都府立大学大学院生による展示解説にかかる予備調査。

(2) 平成 25 年～27 年度京都府立大学 ACTR にかかる、舞鶴市内街道調査の補充調査。

上記プロジェクトの詳細な報告については、(1) は本書別章を、また、(2) は『京都府立大学文化遺産叢書』11 号を参照されたい。

調査対象地は、京都府宮津市の成相寺・大谷寺、伊根町平田区・亀島区、同町の浦嶋神社、京都府舞鶴市吉坂地区、同市の松尾寺である。これらの調査地と調査内容は、(1)・(2) において確認を要する課題をもとに設定した。現地調査の課題から、全体を貫くテーマは、「信仰と生業、および両者の連環」となった。

2. 調査行程

成相寺周辺

宮津市の成相寺周辺においては、主に (1) に関わって、出展される雪舟「天橋立図（複製）」（京都府立丹後郷土資料館蔵）、「与謝之大絵図」（成相寺蔵）、「成相寺参詣曼荼羅」（成相寺蔵）についての現地調査をおこなった。

11 月 16 日午前 10 時 20 分、一行は成相寺に到着した。成相寺では、現在の景観・伽藍配



写真1 傘松公園視点場からみた天橋立
当日は多数の観光客がこの場所から眺望を楽しんでいた。



写真2 大谷寺境内の石造物群
表面に五輪塔の形を彫り込むものや地藏板碑がみられる。(本書「宮津市府中地区の板碑調査」を参照。)



写真3 大谷寺参詣道の商店
海産物をはじめとする名産が売られている。

置と「成相寺参詣曼荼羅」に描かれた境内の表現との比較をおこなった。また、府中など周辺地域との位置関係を把握するため、境内の複数の展望箇所から天橋立周辺の眺望を確認した。天橋立周辺を描く上記の資料については、それぞれ作成時の主題に関わって図像表現に誇張がなされていることが知られている。現地の現況および眺望の把握によって、そうした誇張表現の評価に資することができた。

境内の調査を終えると、大谷道から傘松公園を経由して下山した。傘松公園の中には、「股のぞき発祥の地」という幟を掲げた眺望スポットが設定されていた(写真1)。近代には写真絵はがきなどが登場し、傘松公園側から眺められる天橋立の実景が一般に流布・普及するようになったと指摘されている(上杉2012)。近年、傘松公園一带は整備が進められ、現在の天橋立観光における主要なスポット・視点場としての地位を一層確立しつつある。現地のそうした状況は、栗田半島側から見た真一文字の天橋立を描く、中近世の上記の図像資料と対照をなすものといえよう。図像資料が、ともすれば当たり前のよう考えられている眺望や視点場の歴史的形成過程を知る糸口として、現代的な意義をますます強めていることが実感された。

下山後は、麓にある大谷寺へ向かった。同寺は丹後国一宮の別当寺で「天橋立図」にも描かれている。当地には「権少僧都智海」「文正二年丁亥三月廿一日」と銘のある「智海の板碑」のほか、「弘治三年 六月十五□」「天正二年十月十日」など戦国期の年紀銘をもつ複数の石造物が確認できた(写真2)。

大谷寺から参道を下って南へ向かうと、国道178号に出るまでの区間に土産物店が並んでいる。これらのなかには、阿蘇海の名産として知られているオイルサーディンの缶詰や、「地物じゃこ」などのほか、若狭鯿、鯖のへしこといった福井方面の魚介類を売る店もあった(写



写真4 海上からみた伊根浦

右の陸地は青島。捕鯨時には島と陸地の間を船で封鎖した。

真3)。丹後・若狭一帯の海の幸が当地周辺の土産とされ、地域の人々と海との関係の一端を知ることができる。同時に、土産として購入され、地域外の人々によって消費・贈答されることで、丹後地域と海産物の関係についてのイメージ普及にもつながっていく様子が見えてくる。

伊根浦・浦嶋神社

16日の午後と、17日は(1)に関わって、丹後の海と生業を中心に調査をおこなった。大丹後展には「鯨永代帳」や「伊根湾捕鯨実況図」(いずれも亀島区蔵)が展示されており、その記述・表現に関する実地調査が課題であった。

16日の12時45分、一行は伊根浦に到着した。「道の駅 舟屋の里」で昼食をとり、伊根の名産の鰯を食した。その後、地元漁師の漁船による伊根湾周遊に乗船し、舟屋の並ぶ集落の景観を海上から眺め、全体の構造を把握した(写真4)。また、この時には漁師に依頼して青島に上陸させてもらい、若干の踏査をおこなった。

青島に鎮座する蛭子神社は、江戸時代初期に福井県丹生郡四ヶ浦(現・越前町)から神体に移した神社とされている(伊根町誌編纂



写真5 蛭子神社の鳥居

島の丘陵北東側の麓に位置する。



写真6 鯨墓

平場の一面に墓石・卒塔婆・鯨の骨が置かれている。

翻刻文
木製卒塔婆
《正面》南無妙法蓮華經為大海鯨鯢已亡博魚人天化生發菩提心之
墓石(向かって右)
《正面》□鯨塔
《左側面》(なし)
《右側面》「」政二「」/□
《背面》(なし)
墓石(中央)
《正面》在胎鯨子塔
《左側面》(なし)
《右側面》文化五辰正月廿三日
《背面》(なし)
墓石(向かって左)
《正面》鯨胎凶霊追薦
《左側面》諸法従本来
《右側面》常白寂滅相
《背面》(なし)

委員会編 1985)。日本海を通じた丹後・越前地域の交流が、建立の背景として想定され得る。島の北東部に接岸し上陸すると、目の前には蛭子神社の鳥居と手水鉢が見える（写真5）。この鳥居の奥には石段が連なり、上っていくと、樹木が鬱蒼と茂る平場の中央奥に本殿があった。その後、本殿から石段中腹の踊り場まで下り、その右手（東）を道沿いに進むと、鯨の墓3基などが並ぶ一画があった（写真6）。この一画にある墓石などの銘は図1の通りである。ここには近世後期の墓石のほか、卒塔婆や鯨の骨の一部に置かれており、小規模ではあるが慰霊空間が広がっていた。伊根浦では、「鯨永代帳」の記述から少なくとも明暦2年（1656）より捕鯨がおこなわれていたことが確認できる。青島の鯨墓の存在は、近世以来の鯨漁が鯨の供養を伴って行われており、生業と信仰が不可分な関係にあったことを示す文化遺産と考えられる。

下船後は、立石・耳鼻・亀山集落を踏査し舟屋集落や半島部の地形の現況を確認した。「伊根湾捕鯨実況図」に描かれている、小規模の鯨を追い込む湾入部分は耳鼻にあり、周囲の地形条件と図像の表現・文字記述と合わせて、過去の捕鯨の様相について検討した。また、踏査中、集落の山の手には寺社が複数見受けられた。集落あるいは区レベルでの信仰との関係は未調査であるが、阿宇野神社の境内に船の碇が置かれているのを確認するなど、神社境内の空間の集

落における位置付けについて、興味深い状況を見ることができた。集落内には、個人宅で所有するトイレを散策用に提供する旨を記す伊根町の看板が立つなど、観光者に向けた施設整備の様子が見られた（写真7）。舟屋集落や漁業資源を利用したツーリズムに対応する町や集落の現在の状況がうかがえる。平成26年、天橋立と伊根を往復する伊根航路が観光用路線として31年ぶりに再就航し、天橋立～伊根～網野～浜詰・夕日ヶ浦ルートの周遊バスが期間限定で運行される（伊根町観光協会 web サイト）など、近年、丹後地域を横断的にめぐることができる交通手段が増えている。また、丹後地域以外からのアクセスも、平成27年7月の京都縦貫自動車道全通により利便性が高まっている。海と丹後地域のつながりにツーリズムを通じて触れる機会は、今後一層高まるものと思われる。地域とツーリズムにおける文化遺産の位置付けと観光施設整備の問題については、今後も当地域の課題になり得るであろう。

16時には、浦嶋神社を訪れた。伊根町本庄浜にある同社は、丹後国風土記に記述されている浦嶋子伝承地の一つ「筒川」一帯に位置し、浦嶋子（筒川大明神）を祭神としている。享保



写真7 観光用施設を示す看板
立石区にあり。

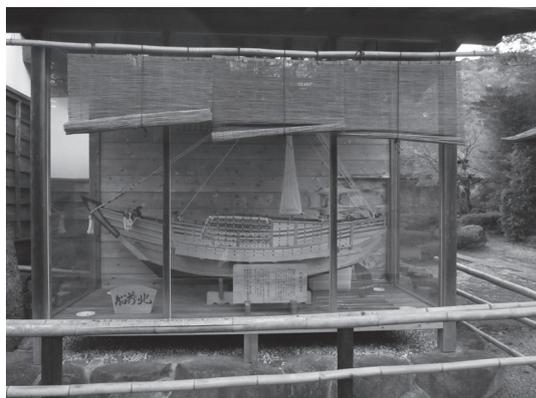


写真8 浦嶋神社に奉納された北前船
ケースに収められ、境内にて公開されている。

9年(1724)に成相寺に寄進された「与謝之大絵図」には、筒川の沿岸に「嶋子竜宮ヨリ帰りタル所也」と記されており、近世中期においても浦島伝承の故地と認識されていることが知られている。境内には奉納された北前船の模型が展示されており(写真8)、浦島伝承とともに、「この地方の産物等を積み込み経済に貢献したと言われ」ている北前船の記憶を残していた。ここでも日本海地域の交流を示すものを見出すことができた。

17日は、メンバーを二つの班に分け、うち一班が午前・午後ともに伊根の集落で聞き取りをおこなった。

聞き取りは、昔の鰯の加工法、そして伊根浦の集落における近現代の漁業や米の入手過程などについて調査した。特に前者については、大丹後展に出展された寛政11年(1799)刊行の『日本山海名産図会』に、丹後鰯は内臓を除き塩漬けに加工して宮津市場へ売り出す旨が記述されていることから、そうした加工法の変遷について情報を得ることを目的にしていた。

鰯の塩漬けについては、80歳代半ばまでの年齢層の話では、そのような加工がなされていたという記憶がない人が複数であったが、90歳代の人のお話では、昭和20年(1945)頃に漁協で鰯を3枚におろし塩漬けに加工していたこと、また、個人の家でも保存食として塩漬けにすることがあった、との話を聞くことができた。また、別の人からは、鰯をへしこにして保存していたことがある、という話も聞くことができ、鰯の保存・加工にいくつか方法があったことがうかがえた。現在、鰯の塩漬けは能登地域で漁獲されたものが加工されていることが一般的に知られているが、丹後地域での様相は不明な点があり、今回、年齢層の高い方への聞き取りで、その一端を知ることができた点は重要と思われる。

このほか漁業・生活に関連して、戦時中、伊根に潜水艦が停泊しており、米軍の爆撃による爆風で湾内の魚が打ち上げられみんなでその魚をとったことがある、という話や、本庄や朝妻など山側の地域から米を入手し、またそうした地域との間で流通や相互の通婚といった人的移動があったことなどを聞くことができた。生業・生活の総体、そして個々の出来事の詳細を捉えるには、なお調査が必要であるが、その概要や興味深いトピックについて知ることができたといえる。

松尾寺参詣道

17日の午前・午後、もう一つの班は、(1)に関連して、大丹後展に出展の「松尾寺参詣曼荼羅」(松尾寺蔵)にかかる実地調査、そして(2)の補充調査として、松尾寺駅から松尾寺境内にいたる参詣道の踏査を実施した。この成果については既述の通り別書を参照されたい。ここでは、別書の報告とは重複をできるだけ避けつつ、当日の踏査経過を簡単に報告するに留める。

17日の9時5分、JR小浜線松尾寺駅に到着し、徒歩で松尾寺へと出発した。同寺へ向かう視点から駅前を見ると、前方左手には松尾寺参拝者に向けて社名と電話番号を示すタクシー会



写真9 松尾寺駅前の様子

吉坂橋北詰には、松尾寺参詣に供する案内が立てられている。

社の看板が、また、松尾寺までの距離を示す「東海自然歩道」標柱が立っており、参拝に向けた玄関口としての性格をもった場所となっていることがわかる（写真9）。平成25年度の舞鶴市内街道調査の際に営業が確認できたコンビニエンスストアは、駅からの道の脇に、徒歩一分圏内にあった。国道に面している位置でもあり、人・自動車の往来に対応した立地であったと評価できるが、残念ながらこの調査以前に閉店してしまっていた。

徒歩で国道27号・府道564号を経由し、松尾寺境内まで上った。境内では、「松尾寺参詣曼荼羅」に描かれている景観を、現在のそれと比較した。とりわけ、曼荼羅に描かれている境内南西の池は、現在も同じ地点にほぼ同様の形態が残されていることを確認した。曼荼羅の描かれたとされる室町時代以降新しい建物が登場し、曼荼羅にはない池の奥（北）側の段差が現在みられるなど、周囲の変化は大きかったが、描かれた当時とのつながりを反映する現在の景観から確認できた。また、境内の宝物殿では、当時開催されていた第15回秋季展観を見学した。

13時45分頃に境内を後にし、もとの道を下山した。その後、舞鶴赤れんが博物館を見学し、伊根調査班と合流、調査を終了した。

3. 総括

本調査では信仰と生業に着目する視点から、丹後地域の文化遺産と、過去から現在につながる地域的特徴を、自治体単位の枠組みを超えて横断的に把握することができた。特に、海というキーワードから、生業と海を臨む寺社における信仰とのつながり、そして日本海を通じた若狭・越前など他地域とのつながりを捉えることができるように思われる。

今回行った石造物調査や聞き取りは、時間の関係で十分調査ができず、サンプル数が少なく予察的段階に留まる部分も多かった。ただ、平成27年10月16・17日に大丹後展の展示解説にかかる調査として京丹後市域を調査した際の成果（本報告書別項参照）と合わせ見た場合、丹後というスケールからみえる共通性、そして、よりミクロなスケールの地域における特徴を把握する糸口として、興味深い事象を知ることができたと考えられる。

なお、今回の調査成果は、大丹後展における京都府立大学大学院生による解説のほか、平成27年12月12日に京丹後市峰山総合福祉センターにて開催された、シンポジウム「大丹後展のみどころをさぐる」のうち、本学准教授藤本仁文氏講演「海と川が繋ぐ江戸時代」にて一部公表された。

【参考文献・web】

伊根町観光協会 web サイト <http://ine-kankou.jp/>（2016年2月2日最終閲覧）

伊根町誌編纂委員会編 1985『伊根町誌 下巻』伊根町

上杉和央 2012「絵画作品に描かれる天橋立について」『丹後・宮津の街道と信仰』京都府立大学文学部歴史学科

上杉和央編 2012『丹後・宮津の街道と信仰』京都府立大学文学部歴史学科

丹後展企画委員会編 2015『日本のふるさと 大丹後展』京丹後市教育委員会